處の家にても室内には炬燵設けられて雪圍ひにてうす暗けれども落ちつきし住家の如き心地せられていとのどやかなり。外には雪降りつづきて繽紛と窓うつ聲の梢鳴らす北風と交りて聞ゆる夜にも内には炬燵圍みし一群の乾柿食うべつゝ夜の更くるをうち忘れて語りつづくる樣いと樂しげなり。

思へば北海の寒地に熊を友とするアイヌも樟腦茂れる臺灣の山奥に裸跣にて驅けめぐる生蕃も彼等にとりては都大路の高樓よりははるかに慕はしき處はそが故郷なるべし。郷人に容れられずして郷國に最後の告別をなしたるバイロンも尙且つ「異國の灰となるとも魂は尙故郷を愛するなり」と叫びしなり。更に顧ればかの淡暗き會津の天地は我が最愛の地たるなり、その一樹一河を夢むと雖も、我にとりては千糸万縷の情濃かに傍人のはかり知り得ざる愛郷の念は勃々として湧き出づるなり。

これその自然の美はしきがためなるか、我をはぐゝみ育てし父母あるが故か、はた我と睦みし同胞あるが故か。自然の美はしきは何ぞ會津のみに限らんや、父母去り、同胞に離れし今日尙愛郷の念禁じ能はざるは何故ぞや。

◉硯（即題）

文科二部一年　蚊泉靖子

海もあり陸もありて自ら一つの小さき世界を作りつ其の海は深からねども底には尊き玉もひそむべく其の陸は廣からねども千々の言の葉の出づべきものは硯にあらずやそれ櫻花咲き滿ちたるあした筆さしひたしなば馥郁たる花の香も匂ふべく皎々たる月の夕墨すり流さばさやけきかけもやどるべしされば月花のあした夕は更にて樂しきにつけ悲しきにつけ心一つにあまる思ひを紙にうつすは此の石のいさをにこそ。

あはれ清き机の上におきて日ねもす硯の小世界に鑒み海をあさりて玉をひろひ陸を耕して千々の言の葉を拾ふはいと興ある事にあらずや。

短　歌

柴　舟

伊香保にて

年暮れぬ雪はだらなる赤城山靜かに見れば涙こぼるゝ

さびしきは冬の山かないはほさへ木さへ群がり立ちは立てども

こぼれたる雪の色のみうき出でゝ夕かげ早き冬の山かな

一人してあらるべしやは雪ぐもり風なき山の空にむかひて

雪近み落ちぬべき葉もおちて來ぬ山の林の年のくれかた

中空に消えたる雪が襟卷のさきに露する朝の湯の谷

あはれなる雪の隱れ家湯の谷の烟の中に羽ならす鳥

夕日さす雪の林のあかるさにおぼえず歌ふ口馴れし歌

風をいたみ日かげもさゝぬ崖下の住ひかなしや冬の山里

湯の烟烟れる雪とみだれあふ冬の谷間を今日も見るかな